昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十五年七月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十二巻 第七号

（通第三七三号）

目次

此時局をいかにせん……近角常観……(1)
信を行く旅人抄……池山榮吉……(8)
御一代聞書抄（続九）……井上善右衛門……(12)
自照日誌抄（22）……西元宗助……(15)
念仏詩抄……木村無相……(18)
疾病と信仰(2)……花田正夫……(20)

此時局をいかにせん

――仏智不思議を信ぜよ――

近角常観

仏智不思議を信ずると否とは、他力真宗たると否との分水嶺である。これが人生上如何ともすべからざる我等を救済したまう大威神力である故に、ひとたびこれを信ずる以上は、人生如何なる出来事に対しても必ずおのずから解決の方法があるのである。

先づ信仰の一念に不思議の仏智を信ずる点より始めよう。そもそも現在の思潮を見るに、一方には現実主義、功利主義、自然主義等ありて、徒らに結果を追うて殆んど手段の如何を顧みず、漫に自己の性情の欲する所をほしいままにして、底止するのを知らぬ。ここに於て一方には律法王義、厳正主義、刑名主義が起って、飽まで是非善悪を明かにして勧善懲悪の方法で、時弊を矯正せんとしている。

今や我国は思想界、教育界、政治界、宗教界にいたるまで、この二傾向が頂上に達して、思いもかけぬ出来事が現出してある。前者の不可なるは言うまでもないが、後者の方法が果して時弊を廓清して清明の世界を開き得るであろうか？

罪あれば禍を得、善あれば福を得る罪福主義で人生を救済しようとすれば、結局廃悪修善でやり通すという自力主義である。それかと云って、邪見に陥りてこれが当世なりと云うて違法を敢てし、罪悪救済の名の下に放縦主義に走る如き非を矯めるのは、権仮方便の方法ではあるが、それだけでは飽まで罪悪を救済し、煩悩を悲憫し、驕慢を懺悔せしめ、懈怠を慚愧せしめて、清浄なる光明中に摂取せらるることは出来ぬ。近時刑事政策が国家唯一の威力となって政治、教育、宗教界もほとんどその脚下に踏みにじられているのは、一時の臨機応急策であっても、決して社会を根本的に救う道ではない。恐らくは人心をして却って荒廃せしめるものではなかろうか。而もこれをとがめる者もなく、将来頗る寒心すべきものがある。

今時、予の如き言をなした者はなかろう。然し信仰の眼より真面目に考えて見るがよい。人間誰か敢然として他人を罪し得る力があるか。かく言えばとてトルストイの様に裁判を否定するのでもなく、現実主義、功利主義、自然主義の味方をするのでもない。刑名主義一辺倒をもって人生を救い得ると考えている偏重な刑名政策者流の蒙をひらかんために一言したのである。

然らば何を以て人生を救い得べきか。曰く仏智不思議である。それは罪悪でもよいという横着主義ではない、煩悩でもよいという気儘主義でもない。その横着な我儘な我等に対して、飽まで見捨て給わぬ事実の親心である。横着につまづき、気儘に行きつまり、律法主義、厳格主義、刑名主義の桎梏（あしかせてかせ）に苦しめられて、如何ともすべからざる地獄必定の我等に対して、無限大悲の涙をもって我等が苦悩を悲憫したまう親心である。

此時局を如何にせん！　これいやしくも心ある人々の胸中に自問自答せんとする問題である。而も未だその真の解決をきかぬ。現実主義、功利主義を生命とする政治界が分らぬのは無理もない、律法主義、形式主義に囚われている教育界の気付かぬのも当然であるが、本願不思議を生命とする真宗の者が、この信仰的解決を悟らぬのはあまりと言えばあまりではないか。勿論、この本願不思議をそのまま生きて信じられて居れば、今日の時局は来る筈がない。して見れば忽ちこの本願不思議に救われねばならぬ様な時機に追いつめられているのである。警鐘は乱打されている、火の手は上っている、しかも他家の火事ではない、各々自家頭上に燃えているのである。和讃に曰く。

釈迦韋提方便して　浄土の機縁熟すれば
雨行大臣証として　闍王逆悪興ぜしむ
信仰の機縁はまさに純熟しているのである。

この際、制度政策等の現実主義、功利主義で救わんとするのは、火を以て火を消さんとするのである。宗教界が俗界の真似をすることによって失火したのではないか、その道は駄目である。然るに律法主義、厳格主義を今さら呼号して人を責めて居るのは何事ぞ！　すでに刑名政策の律法主義の打撃によって傷いて井に落ちた者に対して、なお石を落さんとする残酷を敢てして、結局どうしようとするのであろうか。他家の火事の如く高見の見物する者、すでに火が全般に廻りつつあることが分らぬか。実に煩悩具足の

凡夫、火宅無常の世界である。

噫、そらごとなるかな、たわごとなるかな、虚仮なるかな、不実なるかな。何等の策もなく、何等の術もなし。この如く何れの道をも見出し得ぬ我等を悲憫したまうが本願の不思議である。歎異抄三章の「煩悩具足の凡夫は何れの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまいて願を起したまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」と。この人生問題の大事によって直に本願不思議をいただくべきである。

何としても見ようがない、施すべき術がない、無策である、とても人間のはからいでは間に合わぬ。全体人間の浅薄なる猿智慧やら、虚勢を以て世を欺き得べし、人を誤魔かし得べしと思うのが間違いである。世間の所謂政策、謀術なるものが皆駄目な所以である。かくの如く人間の何ともして見ようのないもの憐みたまう如来の大悲である。人間のはからいたえはてて、如来の遣る瀬ない御はからいにはからわれ奉るのである。かく云えばとて無為無策で茫然として居れというのではない。かくの如く如何ともすべからざるを飽まで見捨てたまわぬ大悲大願が、誓願の不思議である。仏智不思議である。すべからくこの不思議の仏智の下に我等の罪悪を慚愧すべきである、これが義なきを義とすである、無策の策である。

ここに大いに注意すべき点がある。世人は自覚であると叫んでいるが、その自覚の何たるかを悟らぬ、信心じや、唯信仏語じやと高く標榜したとて一体どうするのじや。かって或人が念仏主義じや〳〵というて倒れた人があった。晦巌和尚は、火事の時小僧が仏前に出て、消災陀羅尼を高唱して居ったら、水を頭からぶっかけて、寝とぼけるなといつたとある。此際の信心じや、念仏じや、自覚じやというのは一体どうすることじや。

今日以後は信仰でやるのじゃと発表することでもない。ソロソロ仏前に詣でて念仏することじゃと思うべからず。今が実に私が常に云う仕て見ようのない時ではないか、何れの行も及び難き身なれば地獄は一定すみかではないか。仕て見ようのない者を憐みたまうというは、実にこの事局を憐みたまうのではないか。何れの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまうというは、今現に何んとも仕て見ようのないのを飽まで悲憫したまうのである、哀愍摂取したまうのである。これがかねて待ちかねたまう本願招喚のお呼び声である。

しかもその本願の御思召は、その悪しきもの、苦しめるもの、して見ようのなき者、煩悩具足の我等、破戒無戒の凡愚、五逆十悪の徒を飽まで見捨てたまわぬ親心である。唯五逆と誹謗正法のものを除くと抑止したまうた釈尊も、阿闍世主の逆悪の興るに及んでは、我れ阿闍世の為に涅槃に入らず、と仰せられた。これが如来の密語は不思議である。殺された頻婆沙羅王は阿闍世王に、耆婆の言に従うて仏の所に詣でよと告命された。釈尊は阿闍世王に対して、汝罪あらば我等諸仏も亦罪あるべしと仰せられた。七重の室内に幽閉された韋提希夫人に対して、汝今知るや否や阿弥陀仏ここを去ること遠からずと仰せられた。是れ本願成就の尽十方無碍如来を信知せよとの仰せである。

願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば　散乱放逸もすてられず
四方八方見捨てて顧みるものなき逆悪の我一人をたすけんと思召したまいし御苦労が、五劫思惟の本願である、選択の願心である。誓願の不思議である、仏智不思議である、不可称不可説不可思議の南無阿弥陀仏である。

ききょうが悪いと私の言も、小僧の消災陀羅尼と同じと思う者が多いであろう。その様な念仏なれば、定善の気休め念仏、散善の努力念仏であろう。私の云うのは、何れの行も及び難い地獄必定の私に対して、三世十方の間、唯一の救済の念仏である。大悲大願の大行である、浄土真実の行である。選択本願の行である、円融至徳の嘉号、転悪成徳の正智である。

本願円頓一乗は　逆悪摂すと信知して
煩悩菩提体無二と　すみやかにとくさとらしむ

如何なる罪悪深量、煩悩熾盛の我等の心中に、徹到せずんばやまぬという大誓願不可思議力である。

悪くてもよいというのは自然主義である。人も亦悪いのじゃというは現実主義である。悪くてはいかぬというは律法主義、自力主義である。しかるに悪しき我等に対して、悪しければ悪しきほど見捨てられぬというは、如何に深重なる親心ぞや。母の慈愛はややもすれば寛容主義、放縦主義にききあやまるものがある。それでは不思議でも何んでもない。不思議というは人も我も決して許さぬ、許されぬという罪悪に対して、飽まで見捨てられぬという大慈大悲である。我等の如き不実極まるものは、誰も顧るものがないのが当然なのに、その不実極まる私を見捨てられぬという如来の清浄真実の大慈大悲の御親心こそ、実に不可称不可思議、回向利益他の至誠心でまします。この如来の御ことを聞けば、いかにそらごとたわごとまことあることな

き我等も、頭がさがりて慚愧懺悔せずにはいられぬ。

釈迦弥陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を　発起せしめたまいけり
真心徹到するひとは　金剛心なりければ
三品の懺悔するひとと　ひとしと宗師はのたまえり

これ即ち如来の不思議を信じたのである、仏智の不思議を信知したのである。

不思議の仏智を信ずるを　報土の因としたまえり
信心の正因うることは　かたきがなかになおかたし

これ即ち如来の加威力によりて、大悲広慧力によりて信楽の開発する一念である。そこに広大難思の慶心があらわれるのである。人生問題において人々が信楽を獲得するのは、唯この親心をきくばかりである。否聞く一念に親心がとどくのである、無限大悲の親心に対して疑う余地がないのである。疑蓋無雑の信心歓喜である、信楽開発の一念である。これ劈頭に掲げきたりたる信仰の一念の仏智不思議を信ずることである、これ実に真宗の真宗たる点である。

これ即ち時局に対する徹底した解決である。ここに初めて我等迷妄の夢醒めて、罪悪の我身たることを自覚して、唯不思議を信じたてまつるばかりである。念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなりと、ひとたび仏智の不思議を信じたつまったうえは、時局は如何になりゆくか、結果の如何を顧る余地はないのである。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。仏智不思議を信じ奉れば、たといこれがために如何なる苦痛におちいりてもさらに後悔すべからず候。仏智不思議を信じたてまつれば、たとえこれがために如何なる苦痛に陥りてもさらに後悔はないのである。なんとなればこの私のために、たとい身を諸々の苦毒の中におくとも、我が行は精進にして忍びて終に悔いずと仰せ下さる御慈悲がありがたい。この御慈悲は私が必定地獄におつべきことを見捨てたまわぬおこころにてまします。この慈悲をいただき奉れば、阿鼻世の告白せし如く、たとい無量億劫阿鼻地獄におつるも苦しみとせぬのである。いわんや時局が如何になりゆくも更に後悔すべからず候である。かくてこそ時局は解決されたのである。往生ほどの一大事、凡夫のはかろうべきことにあらず、ひとすじに如来にまかせたてまつるべきなり、すべて凡夫にかぎらず、補処の弥勒をはじめとして、仏智の不思議をはかろうべきに非ず、まして凡夫の浅智をや、かえすがえすも如来にまかせたてまつるべきなり。

これ徹底せる時局の解決である。否如何なる時においても徹底した解決である。また如何なる問題も言下に解決が出来るのである。なんとなれば定散自力の解決でないからである、他力廻向の解決である。されど他力ということは単に空しく成行きにまかすことと考えてはならぬ、如何なる場合でも我等を飽まで見捨てたまわぬ本願不思議を疑うことが出来ないのである。否現に我等自力の立場を廻えして仏智不思議の御はからいを仰ぎたてまつるばかりである。聖人が御消息に、仏天のはからいにまかせ奉るべしと仰せられたがこれである、仏智不思議を信じ奉る一念の信心より、自ら来る大人生観である。

聖人は慈信房善鸞が、関東において聖人の弟子の信者に異義をすすめて多くの人々を惑わした時にも、仏天の御はからいにまかせ候べしとのみ仰せられたのである。世は如何になりゆくとも我等を飽までお見捨てなき親心ましますことを頂きたる以上は、たとい地獄の炎に焼かるるとも、天地砕くることあるとも、更に悔む所はないのである。

かって私は或人と共に現代の事について対談している時、或人は現時日本国民の精神上の貧弱について中心より深く慨歎して、かくの如くしては国民の将来の行く末は亡国であると断言して頗る悲観の声を放たれた、まことに痛歎人の骨髄をうがつものであった。私は唯々恐縮するのみでありました。しかし私は決して悲観することはさらにないのである。何んとなれば他人のことではない、何れの行も及び難い地獄必死の私を、飽まで見捨てたまわぬ親心にてまします以上は、如何に精神的に貧弱であろうとも、お見捨てなき仏智不思議を信じ奉れば、人世は如何に暗黒になりゆくとも更に悲観することも失望することも全然無用であると申したことであります。

今時局に対した何等の策もなく、何等の術もなけれども、仏智不思議ましますうえは必ず心配するには及ばぬのであります。否この如き時局の現われ来るのも、つまりはこの如来の不思議、仏智の不思議をいただかねばならぬように導いて下さるのである。

大聖おのおのもろともに　凡愚底下のつみびとを
逆悪もらさぬ誓願に　方便引入せしめけり

前にも申したように、これ浄邦の縁熟したのである、浄業の機があらわれたのである。今や正に浄土の教の興らんとする時機純熟しつつあるのである。我等は唯々大悲の深き思召を仰ぎ奉るばかりである。聖人が「権化の仁斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲正しく逆謗闡提を恵まんと欲してなり」と仰せらるるが是である。

以上この時局を如何にせんということは、単に時局に関与する人のみではない。この際如何ともすべからずと感ずる人は皆同じく如来大悲の御恵みを頂くばかりである。信仰問題の上から云えば、一つとして他人ごとではない、皆私自身のことであります。この時局を他人のことのように思うのが間違いである。政治、教育、宗教の各界の人々も功利主義や律法主義を以て如何ともすべからざることを自覚すべき時が来たのである。正に選択本願が我等国民の上に再び新たに聞くべき機縁が現われた。

本師源空世に出でて　弘願の一乗ひろめつつ
日本一州ことごとく　浄土の機縁あらわれぬ

時正に来れり、各自大悲の弘誓を仰がねばならぬ、仏天はたしかに一大震雷を下して甘露の法雨を注ぎ給うのである。

仏智不思議の誓願を聖徳皇のめぐみにて
正定聚に帰入して　補処の弥勒のごとくなり
聖徳皇のおあわれみに　護持養育たえずして
如来二種の廻向に　すすめいれしめおわします。

然り如来二種の廻向にすすめ入れしめおわします、往相廻向の大行大信、還相廻向の方便引入、人のためならず。聖人曰わく、「つらつら彼を思い静かに此を念うに、達多闍世博く仁慈を施し、弥陀釈迦深く素懐を顕せり」と。噫一切有為の衆生、煩悩具足の凡夫、未来の阿闍世王のために涅槃に入らずと宜いし如来は、永劫常住にましまして我等の上に臨ましたまい、此を去ること遠からずの聖訓は、古今を選ばず、我等の上に被るのである。

いわんや仏滅後の衆生、浊悪不善にして五苦にせめられんとは正にその時である、その機である。定散自力のはからいで誤闇化し得べき時ではない。尽十方無碍光の大慈大悲の名号と光明の父母、我等を呼び、我等を摂取し給うのである。我等真の仏子として不可思議の願海に帰入し奉るべきである。念仏成仏是真宗を体得実現し奉らねばならず、往還廻向の真宗の教行信証を獲得慶喜し奉るべきである、実に悲喜の涙に堪えぬ次第である。

（大正三年八月）

信を行く旅人抄

池山榮吉

「いずれの行もおよびがたき身」結論から出るは一つしかありません。「地獄は一定すみかぞかし」がそれです。人生唯一の目的を、成仏にみとめた聖人の自覚に、こともあろうに地獄落ちが確定したとは、何たる悲愴な成り行きでしょう！　あわれこの窮地から、手を取って引出してくれる知識もがな！　とは絶望のどん底にあえぐ聖人の悲痛な、にもかかわらず、いともはかない叫びでありました。聖人が「あゆみを六角の精舎にはこんで、百日の懇念」をいたされたのは、この転機の最高潮に達した時でありました。

さて聖人は満願の日、汝の望がかなう時は今である、という「告げを五更の孤枕に得て」道を四条の橋にさしかかったとき、ゆくりなく出遇ったのが、かねて懇意の聖覚法印でした。法印は、聖人の顔色惟悴、形容枯槁、泊羅の岸をうろついた屈原のようなのに目をつけて、大層おやつれの御様子、どこぞおわるいのですか、と尋ねると、聖人は実はこうこうでとつつまず打ち明けました。

両聖人の会見

法印は、その御師匠、法然上人を紹介し、切にすすめられるままに、渡に船とよろこんで、吉水の禅房に法然上人を訪ねる道すがら、聖人の胸はあやしくときめいたのでした。観音の霊告や、法印の言を思い合わせると、自分の機に相応した教を聞かして下さるのは、上人を措いて外にはない、上人こそ大善知識に相違ないと、勇みながら法印のひきあわせで法然上人にお会いする様になられたのであります。

何たる崇高な、凡そこの世にありうるかぎり荘厳な場面でしょう！　このいと静かなる会見の席で、聖人の胸裏に點火された絶対他力の心光は、七百年をへだてる今に、私共の上に直射しつつ、永久に限りなく、胸から胸へと、うつされて行くのであります。

然然上人は快く会ってくれました。初対面の時から何とはなしにかたじけなさの感にせまって、せぐりくる涙をおさえながら、自分の九歳入道のことから、二十九歳の今日に至るまでの求道生活のあらましを語って、さてこういうして見ようのない私、何一つ取柄のない私でありますが、どうか今日から弟子として、よろしくお願い申しますと、衷心の希望を打明けたのでありました。

法然上人はこの時、六十九歳の老体でしたが、今若い親鸞の求道の熱列さを聞かされ、それを裏づける真剣さを、そのやつれた面、おとろえた容に看て取ってさながら昔の自分を見せつけられるような気がして、やおら語られた。

「私も丁度あなたと似た路を踏んで来たのです。今ではこうして安らかに暮さして貰っていますが、あなたのお話を聞き、あなたのお姿を見るにつけ、想い出すのは昔のなやましさです。私も九つで父に別れ、その遺言で剃髪し、十五のとき叡山に登ってから随分苦しんだのです。

当時の仏教各宗の如きも、天台・華厳をはじめとして真言・仏心の諸宗から法相・三論にいたるまで、それぞれ深く立入って学びましたが、要するに皆仏性を悟るということを目的とするものでして、入口こそ違いますが、落着く先は一つなのです。而もどの宗でも、教は幽玄高妙を極めたまことに立派なものばかりです。が、いかにせん、私の器量が及びません。経典を解し、行法を修するには、私どもの智慧や能力が余りに貧弱です。ここをこうして行けばよいというこつがのみこめていないのですから、迷いを離れるたよりがない、とすると悪道へ落ちるにきまっている、と朝から晩までそのことばかりが心配でたまらないのです。丁度、渡に船を失い、闇に道に迷ったようなもので、気ばかりあせってどうすることも出来ないのです。

かと云って、そのままじっとしていられない。めげる心で黒谷の法恩蔵に入って一切経をひらいてみました、それも都合五遍までやりましたが、悟りに出られる道は見つかりませんでした。

こうした悲歎のなかにも、幸いに宿善開発の時節が到来しまして、特に善導大師の四帖の疏が目にとまり、拝読しますと、私のような十悪の凡夫が仏に成れる道が説いてありました。まだ深い意味は解らないながらも、なんだか嬉しくて〳〵、ぞくぞくと身の毛がよだつように覚えました、繰返し〳〵三遍、都合八遍読んだのです。

その最後の時、観経の「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行往坐臥、時節の久近を問わず、念々すてざる、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」とある御文を読んだ途端、忽然として大師の仏心に触れることが出来たのでした。あまりの嬉しさに、そばに聞いてる人も無いのに、私のようなしてみようのないもののために、阿弥陀仏は救いの法を五劫思惟の昔から、ちやんときめておかれたのだ！と大声に叫ぶと同時に、「感悦髄にとおり、落涙千行」で、やるせないかたじけなさに涙がとめどなく流れて来るのでした。

法然上人はこういう風に語られて、それから進んで教理の蘊奥に説き及ぼし、要するに、如来選択の願心から信心をたまわる、往生之業、念仏為本、ただ念仏して弥陀のおたすけにあずかるの外はないと、淳々と仰せられたのでありました。

只今お話しました法然・親鸞の両聖人の対談の模様は、実は私の想像に成ったので、これという典拠があるのではありませんが、しかし私は確信して居ります。話の前後、順序こそ違いはあっても、要素・内容にいたっては似たものであったろうと。のみならず法然上人の談として挙げた大部分は、聖覚法印が上人から直に聞いた、上人入信の体験をしるした文の意訳でありまして、上人は必ず親鸞聖人にも、互の体験を問いつ語りつされたに違いない。したがって私の想像も、大体において正鵠を失しては居ないと信じています。

親鸞聖人の法然上人に対する態度は、子の母を思うような渇仰でした。今や聖人の心の内は、道に進むのに役立つ何ものもありません。二十九年の体験によって綺麗さっぱり掃除されてしまった、言葉通りからっぽでした。願わくは上人の垂示によってこの空虚を充たしたいと、聖人ののぞみはこの一点にあった。こういう次第で、一面よき人と仰ぐ信頼があり、他面、虚心怛懐、自見が存在しない限り、上人の所感は、そのまま、聖人のそれとして受容せられるのは心理的必然の経過でなくてはならない。

しかのみならず、上人は告げるに自己の体験をもってした。単に法文の教理を説く、所謂説教というよりは、むしろ信仰の告白であった。説教は、地図を開いて目的地点を指示するようなもの、告白は自身がさきだちになって案内するようなもので、聞く方にもし同様の体験があると、歩調を合わして、案内者のあとについて行くことが出来る。

法然上人の体験の多くは、親鸞聖人にとってはひとごとではない、わが事であった。かって自分の体験した、若しくは現に体験していることであって、それは今、上人の告白を共感するになくてはならない資料であった。今まで廃物として顧慮されなかった過程が、信仰を築きあげる要素としてよみがえった。

師として仰ぐよき人の一言一語が、聖人の身に泌み髄に

とおり、内臓に刻まれる思いのあったのは、もとより当然のことで、「本師源空いまさずば、このたびむなしくすぎなまし」と感謝しつつ、上人は或は勢至、或は弥陀の化身と仰がれたのも、また怪しむに足らないのであります。

随伴する人は案内する人のうちに、先達は後進のうちに生きた。聖親鸞の持合わした煩悩罪障の氷は、聖法然の念仏無碍の光にとかされて、師弟一味の菩提の水となった。後年「善信が信心も上人の御信心もひとつなり」と云われたのが相論のたねとなり、その子細を上人に申上げた時、「源空が信心も如来より賜りたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり、さればただ一つなり云々」という判定があったのは、よくこの間の消息をあらわした逸話であります。第二章の「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもてむなしかるべからず候か」とあるのも、同一信心の告白に外ならないのであります。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」とは、聖人がこの際、師の上人の信仰と同一信味にとけ合った刹那の心的事実であります。聖人は恐らくその席上、不可称・不可説・不可思議の感に打たれて、至心信楽、口をついて出る念仏に「感悦髄にとおり、落涙千行万行」のおのれを見出されたことであったろう、と思うのであります。

この心的事実の告白が、第二章の骨子を形作っています。したがって第一章とは自然におもむきを異にしている。二章が心的過程の記述であるならば、一章は心的現象の観察で、前者の主観的、具体的、特殊的なのに対して、後者は客観的、抽象的、普遍的であります。

第二章の主格は「親鸞におきては」即ち私であり、第一章のそれは、凡そ人であります。もっとも第一章とても、単に空に、たとえば教文の上かり割り出した原理ではない、自家直接の体験を一般的に云いあらわしたものと見るべきであるから、実質的には第二章とかわりませんが、形の上から自然に異った印象をあたえることとなるのであります。

（信を行く旅人より）

御一代記聞書抄（続九）

「仏法に厭足（あきたり）なければ法の不思議を聞く」といへり。前住上人仰せられ候、たとへば世上に我がすき好む事をば知りても〳〵なほ能く知りたく思ふに、人に問い幾度も数寄たる事をば聞いても〳〵能く聞きたく思ふ仏法の事も幾度聞いても飽かぬ事なり、知りても〳〵存じたき事なり、法義をば幾度も〳〵人に問い極め申すべき事なる由仰せられ候」（第二一四条）

一

「仏法に厭足なければ法の不思議を聞く」というのは『華厳経』の文で、『本典』信巻本に引用されています。『華厳経』では「不思議を信ず」となっていますが、今の「不思議を聞く」というのと意に変りはありません。

さて「厭足なければ」という言葉にどのようなこころが含まれているでしょうか。厭足とはあき足ることですからあることに飽きがきて、進んで求めようとする意欲を失う

井上善右ヱ門

状態です。私どもの生活経験にもよくあることで、初めは珍らしいので興味を示しているが、やがて飽きてしまう。眺めのよい景色でも二度三度と見ると、もう見ようと思う気持がなくなることがあります。ところが同じ自然の風景でも、幾度び見ても見飽かない景観があることを経験します。それはどうしてでしょうか。

ある芸術作品の前に立って、見ても〳〵見尽したという気がしない。見れば見るほど奥ゆきが果しなく深まってゆく。私はかって台北の故宮博物館で宋代の青磁の色に魅せられてしまった事があります。その前に立ち尽くして動けないのです。無限の深さが招くとでも言いましょうか。不思議な事だと感じました。

総じて技巧的なものはいくら繊細でも有限です。作り物だという域を出ません。まことの芸術の真価はこの作り物の域を超えるところにありましょう。真実なるものは無限です。その無限に没入して、これを具現する芸術は、我々

の生命を揺り動かす力を宿します。

ましてや究極の真実そのものが、我々人間の究極の問題に喚びかけて来る宗教的精神は、聞けば聞くほど、問えば問うほど、無限の光がこの有限の身を照らして射し込んでくるのです。どうして飽き足ることが出来ましょうか。

二

いま『華厳経』に「仏法」と語られたのは、そのまま弘願の一法であります。如来の本願を聞けば聞くほど、果しない深さ尊さが湧き出ます。そして『勝鬘経』に「法の津沢を得て、信楽の心を生ず」と語られているように「法の不思議を信ず」る世界が開かれる。それを今は「法の不思議を聞く」と述べられているのですから、今ここでは聞と信とは一つであり、真心徹到して本願の真実が胸に徹ることであります。

この本願真実を聞きすすむ心の有様を、我々の生活経験を喩えとして語ってあるのが次の文であります。前住上人とは実如上人の事、その示された言葉は「世上に我がすき好む事をば知りても〳〵なほ能く知りたく思ふ」を述べられていますが、如何にもその通りです。一般の学問の世界でもそうでありまして〝努力して勉強する〟というような言葉は何か空々しく浮き上っています。真に学問するものは己れの研究題目に憑りつかれるものでありまして、究明せずにはおられない心境に踏み込むのです。努力などという意識はそこでは消え去ります。ただ〳〵尋ね求めずにはおられない思い一つになります。祖聖が『大経』に依って「たとひ大千世界にみてらん火をもすぎゆきて、仏の御名をきくひとはながく不退にかなふなり」と和讃に誦されたのもこうした聞名者の心を語られたのでありましょう。

さてその状態に立つようになると、無限の真実に促されてその道を共に行く人の言葉を聞いて己れを前進せしめるよろこびを感じざるをえなくなります。「人に問い幾度も数寄たる事をば聞いては〳〵能く聞きたく思ふ」と世上の事に託して語られてあります。数寄とは好きと同じことで万葉仮名で書いたもの「聞いても〳〵能く聞きたく思ふ」とはその味いをよく言い表した言葉です。

三

こうした嗜好の道の経験を引証としながら、仏法味に語り及んでゆきます。「仏法の事も幾度聞いても飽かぬ事なり、知りても〳〵存じたき事なり」、嗜好や趣味の道は個性と深く結びついた特殊のものですから、総ての人が同じ一つの道を進みうるとは限りません。世間では仏法も特殊な人の関心事と思われている事が多いのですが、真実の宗教は人間という存在の根に関わるものです。言葉を換えれば、人間がまことの人間になるにはどうしても、この道に

関わらざるをえないのです。総ての人間の究極的問題を担うものでありますから、人間が人間たるかぎり、関心をもたざるをえない必然性があります。ただ一日一日を夢と過して自己を問い直すことのないとき、この必然性が殊更に鎖されているのです。

かぎられた一生の儚い関心事、それが愛欲名利というものでしょうが、その儚い関心事が破れたとき、真実の関心事に立ち帰らざるを得なくなります。即ち人間としての必然性が必然に現われてくるのです。それが人間の究極の関心であり、その時まことの生甲斐の問題に人間は立ち向うのです。

そしてそこに有限な人間が無限の真実に摂め取られる体験が聞かれゆくのです。「幾度び聞いても飽かぬことなり」といわれていますが、法味愛楽の人は常にこのよろこびを語っています。「法敬九十まで存命さふらふ。この歳まで聴聞申し候へども、これまでと存知たることなし、飽足もなきことなりと申され候」（四八条）とあり、また一三一条には「道宗はただ一つ御詞をいつも聴聞申すが初めたる様に有難き由申され候」と語られ、さらに一九七条には「善従申され候、我身は八十にあまるまで徒然という事を知らず、その故は陀弥の御恩の難有きほどを存じ、和讃聖教等を拝見申し候へば心面白くもまたたふときこと充満する故に徒然なる事も更になく候」とよろこびの所懐が述べられています。人間の努力や工夫で味わえることではありません。

このよろこびを身にうることこそ、人間に生れた所詮というべきでありましょう。この道は必ず成就される。成就せねばおかぬ本願がまします。ただ我々は自から鎖している胸に法の真実を問い極めねばなりません。されば「法義をば幾度も〳〵人に問い極め申すべき事なる由、仰せられ候」と本条は結ばれております。

阿弥陀様からの御手紙

酒井幽演師が、発病以来八年間の養生の末、最後の床につかれた時、御長男の正知さんは満州からシベリアに抑留されていた。ところが終戦後はじめての便りが師の病床にとどきました。師は非常によろこばれて

「このはがき一枚にどんなに力づけて頂くことでしょうか。海山遠く、幾千里離れて居りながら、会った心地がするではないか。御文章や、御聖教は、お阿弥陀様からの御手紙だよ。このはがきを読む気持で拝読なさい」

といって、共々にお念仏申されました。

自照日誌抄（22）

――一人一道――

西元宗助

さる五月二十三日、ロイヤル・ホテルで国際仏教文化教会の初会合とレセプションがありました。この協会の推進者は佐藤哲英・山崎昭見・井上智勇等の諸先生。それに今はアメリカの宮地廓慧兄など。しかし最もご熱心なのは、なんといっても数千万円の私財を寄せられた西本願寺前門主の大谷光照師であられる。それだけに真実の仏教である浄土真宗を世界に弘布したいという悲願にたつ本協会の、地道な発展をひそかに願ってやまない。

じっさい、この問題はひとごとではない。法灯奉告法要参列のためアメリカ帰国中の関法善開教使（ニューヨーク）や赤星真目開教使（シープルック駐在）に承ると、アメリカにおいては開教使の非常な不足のため、自分たちは七十才を越えてはいるが、今もなお第一線を引退するわけにいかぬと。

それらを承りつつ、光真ご門主の「聖人の遺弟の自覚」というお言葉をかみしめて、あらためて慚愧することでありました。宗助よ、すこしは本気になったかと。

○　○

五月二十五日（日）は足利浄円先生の御命日。先生の世を去られて早や満二十年。まったく久振りに旧自照同人、山ノ内の今田宅に会して、切々と先生をお偲びすることでありました。

まず瓜生津隆雄師ご導師のもと、阿弥陀経読経。ついで桐溪順忍師の御法話（和上は既に八十三才であられる）。そのあと花岡大学、中井玄英の両兄ならびに金子大栄夫人など。そして浄円先生の御遺族である今田達氏（同朋舎KK社長）その母堂寿子夫人から供養のご馳走にあづかる。

このようなことで、足利浄円先生につらなる御縁の方々と久振りにおめにかかれて、こんな嬉しい有難いことはありませんでした。なお井上善右ヱ門、石田充之の両兄はそれぞれ、残念ながら病気でご欠席。

○　○

わたしごとになって恐縮ながら五月八日。末女、ご縁あって三河蒲郡の西福寺さん（お東）に嫁がせていただく。本人たちはかねて相思相愛、ありがたく、かつは嬉しいことでありました。なお御本堂での披露宴の席上、花田正夫先生からの左の祝電が、特に披露されて感銘の深いことでありました。つつしんで御礼申しあげます。

念仏の道づれ嬉し　若葉どき

○　○

老夫妻ふたり切りになって淋しいでしょうと、よく云われる。しかし、今のところ、少しも淋しくはない。ただ二人切りになって、家が広くなったという感は切実である。それにこんなことを書くと、笑われるかも知れませんが、新婚時代とは全く異りながら、しかしどこかに新婚当時の気持がよみがえったような新鮮な気配のあることも半面の事実。というのは、朝晩、いつも影の形にそうように、いつも私と共にある家妻だけですから。じっさい、こうなれば、わたしにとっては、もう老妻しかないのですから。しかも、その老妻とも、いつかわ別れねばならぬときがくるのですから、早かれ、おそかれ。それだけに、わが東井義雄先生の次の詩は、わたしもに身に泌みるものがございます。

妻

ひょっとして　これは
わたしのために生れてきてくれた
女ではなかったか

その家妻が、学生時代の、同窓会にそれこそ久振りに出席し、しかし日帰りで東京から夜おそく帰宅して、しんみりと云うこと。あなた、せめてあと十年、子どもたちのためにも、元気でいましょうね。それに今後は、あなたが講演などで地方に出かけられるときは、わたし留守番しないで、ご迷惑でも、お伴させていただくようにして、晩年の金子先生の奥さまのように―私も法話を承って。

だって私たち、こうして一緒に暮らさせていただけるのも、ホントにあと僅かなんですから。こんど久振りにクラス会に出席してみてつくづく感じましたワ。ご主人を亡くしているかた、案外多いのです。それにご自分も血圧が高いとか、神経痛だとか、それぞれ故障のおありの方も。私どもだって、いつ、なんどきと、しんみりという。

○　○

最後に例によって、お経のように謹誦する榎本栄一翁の

詩をひとつ。榎本さん、いつも、いつも、ありがとうございます。

一人一道

人間はみな
たれも通ったことのない
自分が　はじめて通る道を
一生かかってあるく
なみあむだぶつ

寸言

風呂に入るには着物を脱いで裸になるように、歎異抄の風呂もまた持ち物も着物も取り去って入らねばならぬ。

また切角風呂に入っても、充分垢を洗いすみ〳〵まで温まらないと、あとで風邪を引き易いものだ。

○

大阪の芸者屋に育った妻吉が、間違えられて両手を切りおとされた。傷は癒えたけれど片輪者になって、どうして生きてよいのか五里霧中の時に、旅館の庭さきに飼われていた小鳥が、嘴ひとつで、立派に雛をそだてているのを見出して大いに教えられた。

自分には両手はないが、まだ口がある、足がある、目もある。この口で、字も書けるに違いない……。と決心して、毎日練習して遂に一道の達人となった。

静岡の中村久子さんは、両脚、両手のない、ダルマさん同様の身でありながら、縫物も、文字も、立派に出来る人となっている。

こうした方々から、我々はかえって五体満足の片輪者と叱られぬようにと願っている。

念仏詩抄

木村無相

今聞かぬと

香師おおせに　　香師＝香樹院徳龍師
〝死ぬるまで
死ぬまい〳〵と
思うておる——
臨終まで
ようなろう〳〵と
思うておる——
もうかなわぬと
思うとき
はじめてうろたえる〟
もうかなわぬときは
もうかなわぬ——
今・今・今

今聞かぬと
聞くときなし
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ただ〳〵弥陀を

香師おおせに
〝これで参らるると
わが心を力にしていたが
信得てみれば
まことの御恩が知れる〟

力には
ミジンもならぬ
わが心
ただ〳〵弥陀を
たのむほかなし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

如来の念力

香師おおせに
〝御縁にあうて
一滴の涙こぼるるも
如来ご念力なり〟
またのおおせに
〝仏法聴聞の志は
如来の念力よりおこる〟
念力　念力

如来の念力
念力なくては
聞く気おこらず
開こえようなし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

生まれさせて

香師おおせに
〝死ぬるとは思うな
生まるると思え〟

生まるるとよ
生まるるとよ
生まれさせて
くださるるとよ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

疾病と信仰(2)

花田正夫

死につながる病

かって私が岡山の医学生の頃、入院した患者が全快して祝福をうけて家路につく人もあるが、裏門から金色の車に迎えられて音もなく消えて行く人々に度々接した。その都度に深く省みさせられたことは、医学の限界を超えた人々のこころということであった。

医大の三回生の時亡くなった友の最後のつぶやき「僕は医師となって病人の治療をと願ってきたが、こんなに早く駄目になろうとは！」との声は今なお私の耳底にひびいている。誰かの歌に「為すこともなくてこのまま死ぬるかと病める我が友男泣きに泣きぬ」とあるのを思いあわせる。

又長塚節氏が喉頭結核で、余命一年との宣告を受けた時

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしば常の時なりき

我がいのち惜しと悲しといはまくを恥じて思ひしはみな昔なり

と生死巌頭に立っての述懐であった。誰しもそうなりたくないし、また考えたくもないことであるが、この一大事は一人一人直面せねばならぬ、誰にも代って貰うことも、一緒して貰うことも出来ない。

さて、死に立ち向って行った人にヘミングウェイがある。彼は十九の時に迫撃砲の爆発で三日ほど人事不省に陥ちて以来、意識の底にある死に触れ、その死を忘れるために行動をもってした。第二次欧州戦にも行き、メキシコの内乱に関係したり、アフリカでは航空機で二度も落ちている。同時に文学の上で大活躍をしてノーベル賞もうけたのであるが、六十になって肝蔵病と高血圧と糖尿病になり、一年間入院して、一応恢復したものの其後活動が出来なくなって、自殺してしまった。

次に、あきらめようとした人がある。東大の宗数学の岸本英夫教授は、悪性皮膚癌になって、死が問題になった時、

自分には天国も浄土もわからないと云って、最後に、さようならと立派にいって別れたいと、諦観の道をえらんでいる。

以上、活動も、学問も何の力とならない死の問題について、実際に生死巌頭に立って、大きな光を仰いで行った人の実例をあげて、私共のともしびを頂きたいと思う。

一　福間久米吉氏

氏は広島生れで、明治のはじめから、島国日本の発展は貿易による外にないと着眼し、実業家として大成され、神戸に本店、東京に支店を出し、両親によく尽くされた。然し好事魔多しの例にもれず、明治三十九年十月に下顎に癌腫が発生し、四十年二月以来八回の大手術後四十一年三月に五十歳で亡くなられた。

病の初期には、自分は国家のため両親のために働いているし、養生も最善を尽しているから、必ず治してみせると自分の力をたのんでいられたが、第五回の手術を受ける際には死亡通知文と遺書も作られるに及び、実に寂寥の極み、悲哀の極みであった。

次いで第六回の手術後、局部の疼痛は絶頂に達し、心身の苦悶やるかたなく、生きながら地獄の苦患に落ちて、不平不満のあまりに、令息甲松君を罵って

「汝のすることは偽孝である。己れの許可も得ずに、勝手に医師と相談して余計な手術をした。貴様達はよってたかって己れを苦しめるのではないか？」

と責めた。

これまで粉骨砕身して病床に待してあらゆる努力をした甲松君は、絶望のあまり、父の面前で手にしていた珠数を寸断した。そして涙にしばらく身も漂うばかりであった。その時、フト歎異抄の五章が胸に浮んだ。「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念仏申したることいまだ候はず」そして一道の光明が君の暗黒の胸底を射た。人力は有限で、際限がある。それで行く所まで行き、考える所まで考えると行き詰って絶体絶命の破目におちるのである。そこに無限絶対の弥陀仏の本願に救われねばならぬ。幸に甲松君は聖人の御言葉をとおして仏心のまことに救われたのである。

又、甲松君が珠数を寸断した時、福間氏も心身の苦痛に堪えられず、

「彼は余を捨てた。否余を邪魔者視し、厄介者視しているのである。貴様達はいよいよ己を見捨てたのだ」

と絶望して、こんな処には居らぬ、と病床を立とうとするのを、看護の人々は手とり足とりして種々に慰めるという痛ましい有様になった。

かくて氏は病床に仰臥しながら、医師も妻子も自分の身体もあてにならない、この世に頼むべきものは何一つない

となった時、歎異抄の

「煩悩具足と凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」

という御文が切実に味われ、その刹那、フト「余は仏陀が余を助けたまうということを聞きしものにあらずや」という念が浮び、思わずお念仏申しはじめたのである。そして歎異抄一章の一言一句をしみじみと味われて、仏陀の救済が疑いのない事実となって、家の内がおのずから法悦があふれるようになった。又病中記に「幸か不幸か、今回病床に臥して以来、恥しながら始めて死なることを知れり」

歳末の記には「病は大恩人なり」と、自身の地上の喜びをこえた信界への開眼の上から記していられ「このことは有縁の人々にも気づいて貰いたい」とも誌されている。

—菅瀬芳英師著「実験の信仰」より—

二　池山　清夫人

池山栄吉先生の令室、清夫人は、真宗の教義は一応理解していられたが、信心の花は開けていなかった。ところが大正六年に胃癌で手術不能と聞かれて、その刹那に念仏の人となられ、その悦びを近角先生に次の様に誌された。

○

私事、かねてリウマチスにてなやみ居りましたが、七月以来非常に胃が悪くなりました。それも矢張り服薬の作用と思い、医師より健胃薬など貰って居りましたが、益々痩せるばかり、食事も漸く一ぜんやっと頂く位、あまり衰弱しますので病院で診て貰いましたら、胃癌とのこと（あからさまにはそれとは申しませぬが）、それを聞きました時の私の失望、何とも申しようがございませんでした。八十六の老母、そして生母も七十余の老人をあとに残し、五人の子供のあとあとの始末、主人のこの後の不自由を思いまして実に上気いたさんばかりでした。

然しどうご御安心下さいまし。この刹那の非常の失望と同時に、ハッと如来のお慈悲と申すことに心づき、ア、もう懐しいと申したところで共に暮らせるものではなし、もう手をひいて下さる如来様にお任せするより行く所はないと心づくと共に、胸も張り裂けるほどの切なさが、スーッと開けまして、ア、この病気が万一主人であったらどうであろう。財産は無し、老人子供を抱え、病人を抱え、長い間には収入の途も絶え、そのむごたらしさは如何ばかり、ア、私であってこんな喜ばしいことはない、これも皆おはからいによるところと、スッカリ元気も直り、平気で病院から帰ってまいりました。

併し帰宅後、主人、寿夫、らく子に右の次第を申しましたところ、その歎きは非常なものでございました、主人は

今までの苦労を気の毒と申し、子供は我儘ばかりして誠にすみません、ゆるして下さいと申して泣きますし、両三日と申すものは、どうもこうもならぬ程でしたが、信仰の有難さ、主人もスッカリ思い直し、この頃では最早私は死したるもの故、一日一日と生き延びさせて頂いている、アア有難いことと喜んで、養生と服薬とを怠りなく致して居ります。

病院では、この冬中いかがと申したそうですが、私の立場と致しましては、明日であろうと、また半年後であろうと変りはありませぬが、子供のためには一日でも長く居る方がよろしくと主人も申して居ります。

それで、誠にお忙しい中、申しかねますが、枕もとへ立てる二枚折へ、あなた様の何かお書きになったものを張りたいと存じ、主人にも申しましたらお願いして送っていただく様にと申しますから、どうぞ一筆おしるし下さってお送りのほどをお願い申し上げます。今夏、鞆町で書いていただいたのは、二つとも掛軸にして、朝夕ありがたく拝見いたして居ります。

生前今一度お目もじ致し、親しくお物語り致したいのですが、何を申すも遠方のこと、幾十年の後には、又親しくお目にかかれることと楽しんで居ります。

不時の死と申すことも世間には多いのに、かくも夫婦、親子、心のかぎり名残りを惜しむことも出来、また心の底から打ちとけて、如来様のお慈悲をよろこばせていただくことの出来ますことを、何たる幸せと、主人とも喜んでその日〳〵を愉快に元気に暮して居ります。どうぞ奥様にもよしなに御伝え下さるようひとえに念じ上げます。

どうぞ〳〵死後の処、何分々々よしなに願い上げます。

○

大正七年一月に夫人の申出で、近角先生をお迎えして、生別と死別をかねた法話会を催された。その時、夫人の喜びが余りに大きいので皆の人が感心ばかりして、今癌で逝こうとしている人の心持を汲んでいないのを近角先生がたしなめられて「撫順の炭抗の爆発で一命を拾った日頃から剛信の向坊さんが、突然爆発にあうて人事不省になった時〝しまった〟と大声を出したそうである。種々手当を続けて、南無阿弥陀仏々々々で息を吹き返してきた。斯くしまった、残念だと叫んで死ななければならぬ者を、さぞ残念だろう、その汝を何処までも見捨てぬぞと、このお慈悲がとどくから目が醒めた時南無阿弥陀仏が出たのである」と、法話せられた。これを聞かれて、夫人が大層喜ばれて、「実はこの間からひどく腹が痛むと、折々念仏も申せぬことがあります。たとえ念仏が出来なくてもお見捨てないお慈悲で必ず参らせて下さることは頂いて居りますが、今この有様では、いよいよの時どんな有様で引きとらせてもらえますか。皆の人から大往生を遂げるものの如く思われていて、自分としてはかまいませんが、いらぬことで人に誤解を与えはせぬかと気になっていました。ところが今、しまったの一言しかないのが本当とうけたまわって、はじめて安心しました。どんな有様であろうと、皆が案じることはないことがわかって大変らくになりました」

と御礼を述べられました。

○

夫人の法悦が著しいので、懇意な方から「奥様の御様子では浄土の近づく事が喜ばれましようか」と尋ねられると「いいえ、すこしも死にたいことはありません、一日でも生き延びたいです。主人のため、老母のため、子供等のために生きねばなりません。生きる以上は成るべく苦しみたくない、苦しみを見せて皆を悩ませたくない。未来のことなど何とも思ったことはありませんよ。矢張り歎異抄九章の通りです。しかし今この通りおたすけにあずかって居ればこそ気分だけはこのように元気で、お慈悲に護られて日を過ごさせて貰って居りますうえは、未来も決してお見捨て下さらぬと確信しています。遠からぬうちに皆と別れを惜しみつつ力なくして終る時が来ると覚悟しています。お念仏はすべての事をよきように解決して、今、今、を慰めて下さいます云々。」

と語られました。

○

寿夫様の話によると、癌で手術不能の宣告をうけられた日から、乳呑児の末の子を長女のらく子さんにすっかりまかせ、又、簞笥の引出しに夫々の名を張りつけ、衣服の整理をされるなど、働ける限り夜更けまで続けていられた。

寿夫様は段々衰弱されるお母様にたまりかねて〝お母さん何一つ恩がえしもしないですみません〟と泣き伏すと、〝馬鹿だねお前は、何か返してもらおうと思ってする親は一人も居ないよ〟ときびしくたしなめられた由で、この一言が終生大きく心に刻まれたと述懐しておられた。

むすび

生のよるべ、がそのまま、死の帰するところとひらけ、生死出ずべき道を開いて下さるのが、弥陀仏の根本の願いである。このお蔭で生ける間は仏の心光に照獲せられ、その光に導かれて浄土に生れて成仏させていただけるのである。この道が開けなければ生は不安であり、死は暗闇で、空しく終らねばならない。実に一大事である。

あとがき

近角先生の「此時局を如何にせん」の稿は、大正三年のものであります。この年に第一次欧州戦争がおこり、日本も参戦し、その後、血生臭い世相が続き、終結すると、船成金の横行、米の買い占めによる大騒動があるなど、時局は文字通りに暗澹としていました。こうした渦中にあって如何ともするすべのない者が、ここまでおいでもなく、そのままでしかたがないでもなく、この者の手を引いて下さる方に導かれて、さわり多い道を越えさせていただくばかりであります。それは現時局下にも通じるものがありますので特に掲げさせて頂きました。

信を行く旅人抄では、法然親鸞の面聖人の会見によって点火された信心の火は、あらゆる念仏者の上に再現されていつまでも〳〵続く、と池山先生が申されました。そこに聖人方の歩みがそのまま私共の歩みと再現して下さるのであります。浅原才市翁が、

わたしのこころが　あなたのこころ
あなたのこころが　わたしのこころ
わたしがあなたになるのじやないが
あなたがわたしになるこころ

と讃歎せられたのもおなじ信境であります。

井上様は、真実なることばは、何時きいても、何処できいても、いつも初事にひびくことを御一代聞書の中から讃仰されました。高村光太郎さんは、美の不滅性を見出して晩年は異彩ある彫刻をせられたことを思い合せ、単なる新しさはすぐ陳腐することを知り、仏語の中に錆の来ない金言の輝いていることに気付かせて頂きたいものであります。

西元様は、善財童子の求道の旅に等しい日誌を掲げて下さり、何事につけてましても、われ心得顔にすごすわが身を省みさせられております、それを老いると段々ひどくなりますのは悲しいことであります。

木村さんは、心臓病で、入院か否かの直前に、まあしばらく観察しようとの医師の指示で和上苑で静居とのこと。せめてこの冬になるまでは苑で無事に！　と念じております。

○

安波氏著「信仰体験録」
発行所　京都市左京区高野泉町四〇　文明堂
定価　一〇〇〇円、送料　一六〇円
振替口座　京都七七三四番

八月は例年通り休講

〈御案内〉

○毎月第一、第三日曜、午後一時半
一道会例会。一道会館の南隣り、南区駈上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角。
地下鉄、新端橋終点下車。

○教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
毎月二十四日、午前・午後。
市バス、御器所通り又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車。

○蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。
（但し日曜を除く）尾西市三条板倉
名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋　一〇四七〇番
郵便番号　四五七

慈光　第三十二巻　第六号　昭和五十五年六月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可